

いのちの水を守る 婦人部の植樹活動

常呂漁業協同組合婦人部
新谷 恭子

1. 地域及び漁業の概要

私達の住む常呂町は、網走支庁管内の中部に位置しオホーツク海に面する海岸線は32キロメートル、人口約5千4百人の漁業と農業の町であります。

又、国定公園に指定されている周囲90.2キロメートル、面積149.2平方キロメートルのサロマ湖も有し、更に北海道では5番目に長いサケ・マスの遡上する一級河川の常呂川が、町の中を2分するかの様に豊かな水をたたえて流れております。

私達の所属する常呂漁業協同組合は、正組合員204名で構成され、オホーツク海では4輪採のホタテ桁網漁業を主に、さけ・ます定置網などを行い平成6年度の漁業生産は、5万1千9百トン、89億8千万円でありました。

2. 婦人部組織及び運営

私達の婦人部は昭和33年に設立され、現在役員15名・部員160名で、常呂・栄浦・佐呂間の3つの支部により構成されております。

全道漁婦連や北見地区大会への参加や、地元の婦人団体等と交流を図ったりしております。

また組合が町民に対し、日頃の協力に感謝する意味を込めて行っている、「常呂ほたてまつり」へ積極的に参加して魚食普及活動の意味を込め、3千5百食のホタテ弁当を作って売ったり、アトラクションや海難遺児への募金活動を行ったりして、当日集る3万人以上のお客様に喜ばれております。

さらに、組合所有地への植樹活動で一日汗を流したり、社会的視野の拡大と部員間の親睦を深めるためにも、道内外を視察研修旅行して地域の実態に即応した漁業経営と、希望ある明るい漁村・人づくりを目的に、活動を推進しております。

3. 活動課題選定の理由

私達婦人部は、先代が味わった苦い思いと、それに立ち向った勇気を無にしないためにも、13年前より植樹活動を続けてまいりました。

それは、昭和30年代にサケが大量に死んで海岸に打ち上げられた時、その原因が常呂川上流の北見市にあった、パルプ工場や澱粉工場の廃液が魚のエラに入って窒息死した事と分かりました。

貧しかった漁師にとっては死活問題でしたので、組合と一丸となって総決起集会を開き

「母なる川、常呂川」を汚染から守るために運動を推進して、その工場を川の淵から移転させました。

当時は、工場や生活排水の総てが川にタレ流しでしたので、昭和45年に全国で2番目の早さで「水質汚濁防止法」による環境基準が常呂川に設定され、そのため毎年春とサケ・マスの遡上する秋には、上流の北見市まで婦人部も一緒に河川パトロールに参加して、汚染や汚濁の防止に目を見張っております。

これらの苦い経験から、漁師は「良い森なくして良い水はない」との思いで、かつては飲み水にしていたと言われる常呂川、生命あるもの総てを育ててくれた常呂川の水を守ることが、川や海を豊かにし、我々にも大きな恵みをもたらし、更に緑豊かな山は、生命の水を保全してくれるものと信じて、「水資源涵養林」を造成するため、常呂川上流にある山林をこの時取得したわけです。

同時に、サロマ湖畔にも「魚付き保安林」を組合事業として造成する中、私達婦人部も先人の思いを受け継いで活動を始めました。

4. 実践活動状況及び効果

植樹活動は、昭和37年から41年までに常呂地区の組合所有地約95ヘクタールの山に、当時はカラ松を主に24万本を森林組合の指導と協力によって植林。

昭和57年から63年には、常呂町の栄浦ワッカ地区に「魚付き保安林」として、カシワナラ・トド松・イタチハギなど13万本を植樹し、昭和63年には「道漁婦連創立30周年記念植樹」の「お魚を殖やす植樹運動」と合せて行い、将来立派な「魚付き林」となってくれる様、希望と期待をこめて婦人部の記念の標柱を建てました。

7年経った現在は、身の丈以上に大きく成長しております。

又この昭和63年には、置戸町勝山にあるサケふ化場の湧水が少なくなって来たことから調べて見ると、ふ化場の上にある離農した畑や牧場跡地が熊笹の生い茂る山となって、保水力が全くなくなっていました。

組合は、置戸町の協力を得て、その山54ヘクタールを購入し、平成4年までかけて、シラカバ10万2千本、アカエゾ松1万8千本を「水資源涵養林」として、混植による植樹を行い、更に平成5年には、常呂町ふ化場の裏山の国有林伐採跡の山林、9.3ヘクタールの土地へ「分収造林」として、ドド松を主に2万3千本を植えました。

平成6年と7年には、道有林管理センターの協力を得て「植樹の集い」を実施し、アカエゾ松5百本を植えましたが、この山は昭和37年に植えた木が大きく茂り、クワで起すとフワフワとした肥沃な土が現れて、その腐葉土はシットリと水分を含んでいました。

木は植えてから20～30年かかって、こうした効果が現れると聞きます。

まさに先人が30年前に植えた木が、今こうして私達の代に恵みをもたらしてくれるのを目の前で見極め、手に触れることが出来た事はまさに感動でした。

植樹のあとも、シカ等の害によって枯れた木を点検し、森林組合等の指導を受けながら随時補植を行っております。

植樹をする時期は海明け後でもあり、又ホタテ稚貝の放流作業もひかえて、浜が一番忙

しい時でもありますが、私達は海と山を掛け持ちで走り回って作業をしております。

ワッカ地区の魚付き林の時は、“一本でも植えて行くからネー”と、カップを着たままで駆け付けてくれていましたが、置戸の勝山に行くのには片道1時間30分もバスに乗って行く所です。

始めは熊笹に足を滑らし、木の根につまづきながらクワを使うのは大変な作業で、「お父さんと船に乗って魚を捕っている方がよっぽど楽だし、収入になるネー」と悲鳴を上げましたが、植え終わった苗木の列を眺めると、風雪にも耐えてどの木も根付いてほしいと、願いながら今では心地良い汗を拭いております。

翌年植樹にいった時、前の年に植えた枯れ木の様な苗木が緑をなしているのを見付けると、これが“生命のいぶき”なのかと、我が子の成長を見る思いで感動しております。

5. 波及効果

30年以上続いているこの植樹活動に対し、組合は平成4年に、「朝日森林文化賞」を更に平成7年度には、“みどりの環境づくり”の貢献が認められて、道知事より産業貢献賞も受賞し、積極的に協力して来た婦人部としては、この受賞を我が事のように喜んでおるところでございます。

高度成長により、森林が次々へと伐採され土地開発が進み、自然の森や草原がどんどん減っています。

その弊害として河川の氾濫・汚濁・汚染が進む中、漁師の母さん達の「木を植える活動」がマスコミやテレビにに取り上げられた事により、全国各地で“川・湖・海”の汚染問題、また自然環境問題が取り上げられる様になった事は、社会に大きな波紋を投げかけた事と思っております。

又、常呂町でも「一人一本の植樹運動」として、町内の子供達と養殖資材の洗浄施設周辺に、町木のナナカマドを植え、木を植える意味や木の成長する喜びを知ってもらいたいと、親子で一生懸命植えました。

秋には赤い実を一杯に付け、作業をする漁師の疲れを癒してくれています。

又今年になって、北見地区の漁業士会が浜の母さんに続けとばかり立ち上がり、青年部と「オホーツク魚の植樹祭」というシンポジウムを行なって、6月には婦人部に先生になってもらって漁師皆んなで木を植えようという事になりました。

私達が行なって来た事が、オホーツクの漁師を動かす力となった事は、非常にうれしい事であり期待するところでもあります。

6. 今後の計画と問題点

地球規模からみると、樹木の伐採の速度に対し私達が行なっている事は、小さな数、小さな力かも知れませんが、植樹活動は命の水を守る事であり、浜を守る事であると考え、植えた木に対しても人の手をかけなければ、良い森にはならない事も木を植えて見て、山

から教えられました。

今後は、それらの育成管理についても勉強しながら行なっていきたいと思っていますし、又、全道漁婦連が唱える「100年かけて100年前の浜を取り戻そう」との意気込みを、私達も絶やす事なく、子や孫達が漁師に誇りを持って、この恵み豊かなオホーツク海を引継いで行ってくれる様に、更に地球環境を守るためには、いかに私達の行動を社会に理解してもらうかが問題であり、今後社会とも手をたずさえて、点が線に、線がやがて円となって拡がって行く様に根気良く続けて行きたいと思っています。

最後に、オホーツク海の漁師が何故120キロも離れたこの山まで来て、木を植え続けているのかとの思いと、更に“森への感謝”と“心配り”を忘れないために、昨年山の入り口に看板を建てました。

今私達が植えている苗木も、やがては養分をたっぷり含んだ水を森から川へ、川から海へと流し出して、オホーツクの浜はその恵みのお陰で漁場の環境がよくなって、いつまでも活気溢れる浜である事を願いながら、今後も婦人部の植樹活動は続けて参ります。